

特集

——シンポジウム「19世紀出版文化とユニテリアン・ネットワーク——Harriet Martineauを中心として」

Harriet Martineau と Eliza Meteyard

——交差するユニテリアン・ジャーナルとユニテリアン・ネットワーク——

閑田 朋子(日本大学)

はじめに

Jenny Uglow は、その著 *The Lunar Men* (2002) のなかで、18世紀後半から19世紀にかけてのユニテリアン派の特徴を“the most rational and open of all sects, proclaiming only belief in God and arguing for toleration for all, including Catholics” (169) と端的に述べている。Harriet Martineau (1802-76) も Eliza Meteyard (1816-79) も、このような理性的で風通しの良いユニテリアンの精神土壌において進歩的な知性を育んだ女性ジャーナリストである。マーティノーは生涯を通して31冊の本を出版し、雑誌・新聞に数百の記事や論説を発表した (Peterson 61)。一方、ミーティヤードが出版した本は約20冊、雑誌・新聞寄稿で現在見つかっているのは約150本、リプリントも含めれば200を超えている (Kanda 13)。

マーティノーは *Illustrations of Political Economy* (1832-34)、ミーティヤードは *The Life of Josiah Wedgwood* (1865) の出版をもって、一世を風靡した作家である。歴史や経済、政治分野に通じ、様々な社会問題に切り込んでいった彼女たちは、女性作家として特異な存在であった。Nigel Crossによると、男性作家に比べて女性作家の著作の分野には、大きな偏りが見られる。*Cambridge Bibliography of English Literature* 第3巻(1940)には、マイナー・メジャーを問わず19世紀の作家849人の名前が収められている。その女性作家のうち、哲学・歴史・経済学分野等の著を表した者は、わずか3パーセントだと言うのだ (Cross, *Common Writer* 167)。

マーティノーとミーティヤードが、ユニテリアンと関係の深い、複数の同じ雑誌に寄稿し、ユニテリアンの知識人サークルにおいて多くの共通の

知人を得ていたことは偶然ではない。彼女たちが女性でありながら社会派の作家として独り立ちするためには、これらの雑誌と人的ネットワークが不可欠であったのだ。本論は、この二人の作家の初期の寄稿先と出版業界におけるネットワーク作りについて考察することによって、ユニテリアンの人的ネットワークと雑誌の関係性の一角に、光を当てることを目的とする。

1. ヴィクトリア朝において女性が社会派の作家になるということ

ミーティヤードの同業の友人であった Camilla Crosland (Mrs. Newton Crosland, nee Toulmin, 1812-95) は、1893年に出版した自伝において、自身のほぼ70年に渡る文筆業を振り返り、“if a woman possessed literary ability she might write books and so obtain money, but there was a by-law which made her understand that she did so at the risk of being ridiculed and despised by the other sex” (64) と述べている。それでも多くの女性が、経済的な理由から執筆業に手を染めた。定期刊行物への寄稿は元手なしに始められたし、女性の活動領域とされた家のなかでできる仕事でもあり、ガヴァネスや針仕事よりも実入りの良い仕事に思われがちであった (Onslow 17; Beetham 42)。George Eliot (1819-80) はこのような状況を、“The standing apology for women who become writers without any special qualification is, that society shuts them out from other spheres of occupation” (“Silly Novels” 162) と辛らつな言葉でつづっている。

女性作家の成功は、ジョージ・エリオットや Charlotte Brontë (1816-55)、Elizabeth Gaskell (1810-65) のような一部の例外を除けば、商業面でも評価の面でも、男性作家に比べごく限られたものであった (Beetham 43)。その主な原因をクロスは、教育と機会、さらには地位の欠如 (*Common Writer* 203) に帰している。特に女性が社会派のジャーナリストを目指す場合、その難度は跳ね上がった。政治は、男性のものである公領域に属する「女らしくない」話題であり (Purvis 118)、公共図書館の女性用読書室には、19世紀後半になっても、政治・経済・商業関連の雑誌ばかりか一般的な新聞でさえも備え付けられていなかったし、*Blackwood's Magazine*、*The Edinburgh Review*、*Fraser's Magazine*、*The Athenaeum* といった文学・文化・

社会を扱う本格派の雑誌も見当たらなかった (Baggs 290-92)。

女性が社会を己が目で観察する機会もまた極端に限られていた。ディケンズが夜通しロンドンを歩き回り、スラムや下層社会についての情報を直に得ていたことは良く知られている。しかしながら、ミドルクラスの女性は、それがたとえ日中であっても、街中を一人で歩けば、淑女としての品性を疑われたのである (Harman 351)。

女性作家は取材や人脈作り、同業者との情報交換の面でも不利であった。女性が単独で男性にインタビューしたり、男性同業者と話をしたりすれば確実にスキャンダルになった。たとえば同業の既婚男性と二人きりで会った際に、独身のミーティヤードは先輩格のジャーナリストから厳しく叱責されている (Woodring 117)。夫同伴の既婚女性であっても、複数の男性とレストランで食事をすれば、あからさまな悪評が立った時代のことである (Senett 23)。Macmillan や George Smith といった出版社主催の晩餐や接待の場に女性作家が招かれることはなかったし、男性作家が人脈を広げる場であったクラブや公開講演の場に女性が出かけることもまた社会的慣習が許さなかった (Shattock 78)。Eliza Lynn Linton (1822-98) は、小説 *Sowing the Wind* (1867) に登場する女性ジャーナリスト Jane Osborne に、次のように語らせている。

... that's what we women want so much—that varied knowledge got by men—the knowledge you pick up among each other at clubs, and lectures, and in studios and places. You have such different friends—one is an artist, another an engineer, another a chemist, and so on; and ... you can keep yourselves informed on the last things in art science [sic], and politics. (Linton, II, 185)

このような社会において、マーティノーとミーティヤードが社会派の作家になるためには、以下に見ていくように、ユニテリアンの雑誌とユニテリアンのネットワークが不可欠であったのだ。

2. マーティノーとユニテリアン急進派第一世代

19世紀に女性が作家になる場合、まず匿名で雑誌に投稿し、その雑誌と継続的な関係を築き、編集者から助言を得て、やがて独り立ちするという流れが典型的であった(Peterson 61)。ユニテリアンの家庭に育ったマーティノーもこの轍を踏み、20歳の時に、ユニテリアンの宗教誌 *The Monthly Repository* に投稿している。本誌創刊(1806)から1826年まで編集長を務めた Robert Aspland (1782-1845) は、ユニテリアンの牧師であった。1822年11月にマーティノーが *Discipulus* の匿名で発表した“Female Writers on Practical Divinity”は“Mrs. More”と“Mrs. More and Mrs. Barbauld”の2部構成であり、18世紀の女性作家及びその著作について論じている。マーティノーが翌年2月に同誌に発表した評論記事“On Female Education”もまた、Hannah More (1745-1833) や Anna Laetitia Barbauld (1743-1825)、Elizabeth Smith (1776-1806) など18世紀に活躍した女性作家およびその著作を扱っている。マーティノーはこれらの記事を書いた目的を、次のように述べている。

As I think this a subject which it may be useful to consider, both as doing justice to those whose names are before the public, and as exciting the emulation of those of their sex who are capable of imitating such bright examples, I wish to devote this and some future articles to the consideration of some of the works of the English female authors of the day on Practical Divinity. . . . (*Discipulus* [Martineau], “Female Writers on Practical Divinity,” 593)

こうして、「バーボールド夫人の娘」(S. Hunter 59-103; Peterson 62)として出発したマーティノーを、社会派の進歩的ジャーナリストへと変貌させたのは、William Johnson Fox (1786-1864)であろう。フォックスは、ロンドンの Finsbury に位置するユニテリアンの South Place Chapel のカリスマ的な説教師であり、1828年に『マンスリー・リポジトリ』の編集を引き継いでいる。マーティノーは、当時を振り返って、次のように述べている。

... if he [Fox] had then no money to send me, he paid me something more valuable—in a course of frank and generous criticism which was of the utmost benefit to me. His editorial correspondence with me was unquestionably the occasion, and in great measure the cause, of the greatest intellectual progress I ever made before the age of thirty. (*Autobiography* I, 140)

1826年に父親が死亡し、1829年にマーティノー家の織物製造業同族経営が破綻すると、ハリエットは自活の道を探さざるを得なくなった。フォックスから『マンスリー・リポジトリ』編集のためにロンドンに出てきて欲しいという要望を受けたマーティノーは、母親に宛てた1830年1月22日付の手紙のなかで、大英博物館の図書館およびその他のロンドンの図書館を、継続的に使用する必要性を訴えている(44)。さらにその4日後に弟のJames (1805-1900)に宛てた手紙においても、ロンドンに住むことが文筆業を営む上で必要不可欠であることを述べている(qtd. in Peterson 75)。前述のように、公共図書館の女性用読書室で参照できる資料には限りがあったから、性別にかかわらず誰もが同じものを読むことができる大英博物館の図書室は、イギリス中の女性知識人を惹きつけた。彼女たちは女性がロンドンで一人暮らしをすれば家族や友人に眉を顰められることを承知で、大英博物館のそばに移り住んだのである。マーティノーにしても、前述の母宛ての手紙のなかで、“I never entertained so preposterous an idea for a moment as that of going alone into lodgings, and must have expressed myself very ill if I led you to think so. It would be positively disreputable. I thought of boarding in a family”(44-45)と述べている。結局マーティノーは、当座の間は1年のうち3か月間をロンドンの親戚の家で過ごすことにして(Peterson 75-76)、そこでユニテリアン急進派の人々から大きな影響を受け、のちに完全にロンドンに引越すことになる。

ユニテリアン急進派は、ユニテリアンの社会改革家を核として集まった知識人グループである。1830年代にその第一世代の核となったのがフォックスであった。中核となる人物以外は必ずしもユニテリアンではなかったが、ユニテリアン急進派の人々はそのエトスを共有していた。すなわち社

会改革の原動力として、宗派・階級を超えた強い同胞愛や教育、協同組合運動、世界を司る法としての自然(産業化・機械化をも含意した自然科学)に絶対的な信頼を置き、かつラディカルなフェミニズム的傾向を有していた(Gleadle 45-54; 閑田 451-58)。フォックスは1831年に『マンスリー・リポジトリ』を買い取り、このようなエトスを有するユニテリアン急進派の雑誌に作り変えていった。

マーティノーの弟ジェイムズは、ユニテリアン急進派の人々を“free-thinking and free living clique”と見なし(qtd. in Webb, “Fox, William Johnson”)、姉に悪影響を及ぼすのではないかと心配した。当時の規範からすれば自由に過ぎる彼らは確かに「エキセントリックなマイノリティ」(Gleadle 43)ではあったが、その風通しの良いエトスは宗派・階級・性差を超えて様々な知識人を惹きつけた。フォックスのStamford Hillの自宅は人脈の宝庫であり(Webb, “Fox, William Johnson”)、マーティノーがユニテリアン急進派の人々との付き合いのもとで受けた恩恵は計り知れないものであった。マーティノーは当時の体験を、“it amazes me now to think what liberality and forbearance were requisite in the treatment of me by Mr. Fox and the friends I met at his house” (*Autobiography* I, 148)と述べている。

ユニテリアン急進派第一世代が空中分解する前に、マーティノーが確たる人脈を築き、すでに国民的作家になっていたのは幸運なことであった。もともとユニテリアン急進派の過激なフェミニズムは、ユニテリアン主流派の人々から警戒されていた(Gleadle 34)。マーティノーの『経済学例会』シリーズが大成功のうちに終了した翌年(1835)、フォックスは既婚の牧師の身でありながら作曲家のEliza Flower (1803-43)と同棲を始め、これが大変なスキャンダルになってユニテリアン急進派第一世代の解体を招くことになる。マーティノーは仲が良かったイライザと絶交し(Woodring 116)、ユニテリアン急進派グループから離れたのだった(Gleadle 35)。

しかし、それまでほぼ10年に渡る『マンスリー・リポジトリ』への寄稿を通して、マーティノーが作家として成長したことに変わりはない。その間、彼女は評論や、哲学的・道徳的エッセイ、教訓小説、寓話、詩など、考えられる限りほぼあらゆるジャンルの執筆・投稿を試している(Peterson 71)。さらに彼女は、他者の著作を評論するに当たって、出版市場におい

て何が成功し何が失敗しているのか分析し、男性作家に比べて圧倒的に不利な立場に置かれた女性作家の活路を戦略的に見通す目を養ったものと思われる。Linda Peterson は、これについて “Martineau’s writing for the *Monthly Repository* played another crucial role in her professional development: it enabled her to analyze the woman writer’s opportunities in the literary marketplace and imagine how they might be expanded” (65-66) と述べている。こうして彼女は、のちにG・エリオットをして、“the only English woman that possessed thoroughly the art of writing” と呼ばしめる作家に育っていったのである (*Letters* 32)。

3. *Tait’s Edinburgh Magazine* と「女らしくない」トピック

ミーティヤードは英国国教会の家庭の出身であったが、ユニテリアン色の強い土地柄の Shrewsbury で育っている。そこに住む Darwin 一家とミーティヤード一家には親交があり、のちに Josiah Wedgwood (1730-95) の伝記を執筆するに当たって、ミーティヤードは同郷の Charles Darwin (1809-82) の助力を得ている (F. Hunter, “Meteyard, Eliza”)。ウエッジウッド家がユニテリアンの家系であり、陶器で有名なウエッジウッド社の創設者ジョサイアが、チャールズ・ダーウィンの母方の祖父であることは良く知られている。ジョサイアは奴隷解放運動を始め活発な社会活動を行った土地の名士であり、幼少のミーティヤードは、生前の彼と面識のあった人々からその数々の逸話を耳にしながら、育ったのである (Lightbown I, xi)。

1842年に父を亡くしたミーティヤードは、その年のうちにロンドンに移り住んだ (Hardwick 135)。それはマーティノーも選んだ道ではあるが、彼女にはすでにフォックスという伝手があった。ジャーナリストとしてデビューする前にロンドンに引っ越したミーティヤードは、より無謀であり、それだけ不安定な立場にあったと言える。

翌年 (1843) から *Tait’s Edinburgh Magazine* に、ミーティヤードの処女作と思われる小説 “Scenes in the Life of Authoress” (1843-44) が連載されている。本誌と『マンスリー・リポジトリ』には、マーティノーを始め重複する寄稿者が多い。例を挙げれば、作家であり機関車のエンジニアでもあった William Bridges Adams (1797 -1872)、政治経済学者 John Bowring (1792-

1872)、ともに著名な作家・ジャーナリストであったWilliam (1792-1879)とMary Howitt (1799-1888) 夫妻、*The Examiner*の創始者James Henry Leigh Hunt (1784-1859)、1836年から37年まで『マンスリー・リポジトリ』を編集した詩人Richard Hengist Horne (1802-84)、初期フェミニストMary Leman Grimstone (1796-1869) など、いずれもユニテリアン急進派の人々であった。

当時、『テイツ・エディンバラ・マガジン』を編集していたのは、Christian Isobel Johnstone (1781-1857)であった。彼女はメジャーなヴィクトリア朝雑誌における最初の有給女性編集者であった (Duncan 298; Easley, *First Person Anonymous* 62)。主だった定期刊行物の編集者も書き手も読み手も当たり前のように男性であった1830・40年代に、彼女は『テイツ』を1834年から46年まで10年以上に渡って編集し続けたのだから、Alexis Easleyがこれをもってヴィクトリア朝出版業界の重要な節目とするのもうなずける (*First-Person Anonymous* 66)。ジョンストンは「女性のために戦うことをいとわない」(J. Johnston 324) ジャーナリストであり、彼女が編集する間、『テイツ』の女性寄稿者の割合は全体の19%から37%まで伸びている (Easley, “*Tait’s Edinburgh Magazine*” 274)。また、書き手としてのジョンストンは、マーティノーの『経済学例解』が経済学という「女らしくない」テーマを扱っていると非難された際には、『テイツ』誌上、“we believe that there is something in the female mind which particularly fits it for elucidating, in a familiar manner, the intricacies of political economy. The economy of empires is only the economy of families and neighbourhoods on a larger scale” (“Martineau’s Illustrations” 613) と反論しているし、彼女の *Society in America* (1837) についても好意的な評論を発表している (“Martineau’s Society in America” 404-29)。ミーティヤードの「女流作家の人生の出来事」の連載についても、ジョンストンは最大の便宜を図ったようである。本作が突然の打ち切りを迎えた3回目には、1・2回目の紙面の倍以上に当たる11頁が割かれ、物語の展開が最後まで語られている。粗筋だけでも物語が完結するように、ジョンストンが紙面を割いたのだろう。

それでは「女流作家の人生の出来事」は、なぜ突然打ち切られたのだら

うか。その理由は、この連載小説の完成版 *Struggles for Fame* (1845) に対する *The Literary Gazette* の以下の批評から推測し得る。

The talent of the fair author has been exercised upon an incongenial [sic] and ungrateful soil. The bogs, marshes, and wastes of low life are unfit for female cultivation. No woman of respectability can know their nature from experience, and books can neither teach the facts nor how to treat them . . . and we cannot but be sorry that a clever and intelligent lady should have fancied she could paint the manners of the base, vile, and criminal . . . it must be confessed, there are scenes and passages which, from a lady's pen do rather surprise us. (“Struggles for Fame. By Eliza Meteyard” 704)

本作に限らず、ミーティヤードは下層社会の犯罪や貧困、売春、児童虐待や非衛生的な汚濁にまみれた環境を生々しく描いた作家であるが、それらはとても女性の手には負えない、換言すれば「女らしくない」テーマだと考えられていたのだ。ちなみに、この2年後(1847)に発表されたミーティヤードの別の短編について、Michael Slater は、“one of the most sheerly nauseating and horrific pieces in all Victorian journalism” (196) とまで評している。

加えて『名声のための闘い』の終盤に、子どもたちを虐待していた託児所が暴動によって打ち壊される場面がある。民衆の暴動を正義の鉄槌として描くあり方は、マーティノーが『暴徒たち』(*The Rioters: Or, a Tale of Bad Times*, 1827)において労働者の暴動を「愚行」(Martineau, letter to M. B. Maurice, 613)として描いたのと対照的であるし、そもそも労働者の暴動を恐れるヴィクトリア朝のミドルクラスの社会規範に照らせば剣呑であろう。周知のように、マーティノーの他にも多くのミドルクラスの作家が、暴動を危険で反理性的なものとして描いている。例を挙げれば、Benjamin Disraeli (1804-81) の *Sybil: Or the Two Nations* (1845) や C・ブロンテの *Shirley* (1849)、ギヤスケルの *North and South* (1855)、G・エリオットの *Felix Holt: The Radical* (1866)、Charles Dickens (1812-70) の *Barnaby Rudge: A Tale of the*

Riots of Eighty (1841) 等、枚挙にいとまがない。

また、『名声のための闘い』は、ヴィクトリア朝社会のジェンダー・コードを逸脱した作品でもある。本論「1. ヴィクトリア朝において女性が社会派の作家になるということ」の冒頭でカミラ・クロスランドから引用したように、ものを書く女性はそれだけで男性から揶揄される可能性があった時代のことである。それゆえに、多くの女性作家が、名声ではなく生活のために書かざるを得ないのだと言い訳がましく喧伝せざるを得なかったのである (Cross, *Common Writer* 166)。ところが、本作のヒロイン Barbara は、貴族の青年から、誠心誠意の愛をもって求婚された際に次のように答える。

. . . the pursuit of literature, and the duties of a wife, rightfully performed, are things incompatible with one another, so I firmly decline your offer. *Half* love sir, is not worth *whole* ambition. And the woman who wishes to excel in literature must be alone from the cradle to the grave. (Meteyard, *Struggle* III, 367)

愛ある結婚よりも、作家としてキャリアと成功を求める己の野心を優先するバーバラの態度が、無私の心をもって家族に尽くすヴィクトリア朝の理想の女性像、すなわち「家庭の天使」から大きく隔たっていることは言うまでもない。

前述のようにマーティノーは、モアやバーボールドといった先達となる女性作家について評論を書くことで執筆業をスタートし、その後、10年に渡って著作業における女性作家の可能性を模索し、徐々にその活路を見極めていった。これに対して、最初から数々の社会的タブーに挑んだミーティヤードは、いかにも無謀であった。

4. ユニテリアン急進派第二世代と Whittington Club

1840年代中頃になると、ユニテリアン急進派の人々はハウイト夫妻のもとに集まった。夫妻はクエーカー教徒の家庭の出身であったが、この頃にはユニテリアン派のチャペルに通うようになっていた (M. Howitt, *Autobiography* II, 12, 38)。第一世代の解体を目の当たりにした第二世代は、

急進性を矯め自由主義路線に舵を切ってはいたが(閑田 463)、風通しの良いエトスはそのままで、宗派・階級・性差を超えて様々な知識人を惹きつけた。

ディケンズの親友であり、ユーモア雑誌 *Punch* で活躍したミスター・パンチこと Douglas William Jerrold (1803-57) もそのような知識人の一人であり、彼の *Douglas Jerrold's Shilling Magazine* や *Douglas Jerrold's Weekly Newspaper* には、ミーティヤードの多くの短編小説や記事が掲載されている。約 10 年後(1857)のジェロルドの死亡に際して、ミーティヤードは次のように述べている。

It [Douglas Jerrold's death] has been a real affliction to me; a deep, lingering trouble, that will always leave its memory and its pain. He gave me [the pen] name [Silverpen] and place in literature; or at least helped to do so; and my reverence and gratitude are eternal. (Letter to C. R. Smith, 108)

ミーティヤードはジェロルドとハウイト夫妻の共通の知人であり、やがて彼女と夫妻の関係は、マーティノーとフォックスのそれに近いものに変わっていった。すなわち夫妻はミーティヤードの後ろ盾となり、Claptonにある夫妻の自宅はミーティヤードにとって人脈の宝庫と言える場所になった。たとえば夫妻は、1841年1月にパーティを開いた際にフォックスや詩人の R・H・ホーン、そして公衆衛生改革で有名な Thomas Southwood Smith (1788-1861) とともに (Woodring, 119-20)、1850年のクリスマスにはフォックス家の人々やギヤスケルとともに (M. Howitt, *Autobiography* II, 42-43)、ミーティヤードを自宅に招いている。他にも夫妻と親しく付き合っていた者のなかに、先々ミーティヤードが寄稿することになる数々の雑誌の編集者を見出すことができる。例としては *Sharpe's London Magazine* の Anna Maria Hall (1800-81)、*Eliza Cook's Journal* の Eliza Cook (1812-89)、後に Bessie Park (1829-1925) とともに *English Woman's Journal* を編集する Matilda Mary Hays (1820-97) 等が挙げられる (Woodring 27-28, 104, 137)。

1846年4月にウィリアム・ハウイトは *People's Journal* の共同編集者になり、もともとの編集者であった John Saunders (1811-95) と名を連ねた。本誌と『マンスリー・リポジトリ』の執筆陣の間には、フォックスやハウイト夫妻を始め、前述の W・B・アダムズ、R・H・ホーン、メアリ・グリムストーン、マーティノーなど、大きな重複が見られる。ミーティヤードも同誌に寄稿しているが、マーティノーとミーティヤードの人生航路が交わったのは、雑誌上ばかりではなかった。二人はともに、ジェロルドが立案し、ユニテリアン急進派第二世代の人々が中心になって創設した Whittington Club に所属していた。会長はジェロルド、副会長にはディケンズや William Makepeace Thackeray (1811-63)、ハウイト夫妻らとともにマーティノーの名があり、ミーティヤードは評議委員の一人であった (“Whittington Club,” *DJWN*, 8 May 1847, 571)。

ホイットントン・クラブは、伝統的に上流階級男性のものであったクラブに女性や下層中産階級の男性を受け入れたという点で、画期的であった (Kent 31)。女性作家にとってそこは、政治・経済関連の定期刊行物や資料にアクセスできる読書室、一人で来ても外食できるダイニング・ルームを備え (W. Howitt, “Observations” 237)、出版業界における人脈作りもできる夢のような場所であったが、メアリ・ハウイトはミーティヤードに宛てた手紙のなかで、「臆病者」 (“the timid one”) はその急進性に恐れをなすだろうと述べている。性別にかかわらず利用できるクラブは不道徳に陥りやすいという批判をけん制して、『ピーブルズ・ジャーナル』はマーティノーを始めとする高名な「淑女」の作家がホイットントン・クラブの趣旨に賛同していることや (“Whittington Club” 32)、男女がともに利用する大英博物館の図書館において何の問題も生じていないこと (W. Howitt, “Observations,” 237-38) を、世に訴えた。ミーティヤードも同じように大英博物館の図書館の例を出して、『週刊ダグラス・ジェロルド新聞』にホイットントン・クラブの趣旨を擁護する記事を寄稿している (“Whittington Club” 343)。

ミーティヤードはホイットントン・クラブにおいても人脈を広げたようである。会員のなかには、ミーティヤードがのちに寄稿することになる *The Mirror Monthly Magazine* の編集者 Percy Bolingbroke St. John (1821-89)、

のちに彼女の事務弁護士となる John Humphreys Parry (1816-80) と William Shaen (c. 1820-87) の名が見られる (“Whittington Club and Metropolitan” 371)。マーティノーとミーティヤードはのちに文通をしている (*Collected Letters of Harriet Martineau* 229)。知り合ったきっかけは分からないが、二人にはハウイト夫妻の知人・友人のなかにも、そしてホイットントン・クラブの会員のなかにも、多くの共通の知り合いがいたから、互いに面識があっても不思議ではない。

ホイットントン・クラブは栄えたが、ユニテリアン第二世代はあっけなく空中分解する。ウィリアム・ハウイトとジョン・ソーンダスは、『ピープルズ・ジャーナル』の共同編集者であると同時に共同経営者でもあったが、二人は同誌の所有権の配分を巡って意見が合わず、袂を分かつことになる。結果としてハウイトは同誌の編集を辞め、セルフ・ヘルプを世に提唱した Samuel Smiles (1812-1904) の助力を得て (M. Howitt, *Autobiography* II, 42-43)、『ピープルズ・ジャーナル』と値段からレイアウト、内容の傾向までよく似た *Howitt's Journal* を 1847 年に創刊した。ソーンダスとハウイトの二人は、それぞれ『ピープルズ・ジャーナル』と『ハウイツ・ジャーナル』に相手を攻撃する記事を載せ、己こそが正しいと訴える手紙やパンフレットを出版業界の知識人仲間やロンドンおよび地方の新聞社に送りつけた。ユニテリアン急進派は、ソーンダス派とハウイト派の二つに割れた。ジェロルドとマーティノーは前者に、フォックスとスマイルズ、ミーティヤードは後者に付いた。

ハウイト派の人々の寄稿は『ピープルズ・ジャーナル』から消え (Woodring 127-29)、ミーティヤードも寄稿先を一つ失ったわけだが、かわりに『ハウイツ・ジャーナル』が彼女の記事や短編小説を頻繁に掲載するようになった (Kanda 61-63)。しかし編集者たちはミーティヤードの急進性に手を焼いた。1847年にジェロルドがミーティヤードの原稿をつき返してきた時に、メアリ・ハウイトはミーティヤードを次のようにさとしている。

William told me that Douglas Jerold had returned your last paper. I am very very sorry for it, but if it were his sublime matter I do not wonder.

The public is not yet ready for such things. My thoughts are much with you & I have many anxieties about you. (Letter to Meteyard, 5 Aug. 1847)

いずれにせよ、『ピープルズ・ジャーナル』と『ハウイツ・ジャーナル』というよく似た雑誌が、読者を取り合って共倒れしたことは、想像に難くない。1847年12月にソーンドスが、その半年後にハウイツが破産するに至って、周りを巻き込んで大騒ぎになった、この悪名高い論争も幕切れとなった(Woodring 129)。

おわりに——時代の流れのなかで

『テイツ・エディンバラ・マガジン』を始め、『ダグラス・ジェロルズ・シリリング・マガジン』や『ハウイツ・ジャーナル』など、ミーティヤードが1840年代後半から50年代初頭にかけて寄稿した雑誌は、いずれもユニテリアン急進派の人々が深くかかわった大衆向上雑誌であった。大衆向上雑誌は大衆読者層の拡大を背景に、大衆の知的向上を目指し、社会改革における階級間の協働を目指して生まれた雑誌群である。経済・政治・歴史・哲学・科学など幅広い分野を網羅し、貧困や売買春など様々な社会問題を取り上げ、レッセフェール政策を支持し、死刑の撤廃や協同組合運動の拡大を訴えた。マーティノーにとって『マンスリー・リポジトリ』が社会派の作家となるための修練と試行錯誤の場であったように、ミーティヤードにとってはこの大衆向上雑誌群がその修練と試行錯誤の場となった。しかし、大衆向上雑誌のほとんどは短命で、創刊後5年も経たずに消えていった(Maidment 83-84)。

大衆向上雑誌の終焉とともにミーティヤードの生活との戦いが始まった。彼女はユニテリアン急進派を介して築いた人間関係を伝手として、労働者階級の定期刊行物や婦人向け雑誌に売文業を続け、やがて過労がたたって体を壊すことになる。休息を必要としたミーティヤードは、1851年7月9日付で王室勅許文学基金に申し込みをしている(Royal Literary Fund, Case File no. 1269, Reel 46)。王室勅許文学基金は困窮する作家への経済的支援を目的とし、受給者にはSamuel Taylor Coleridge (1772-1834)やThomas

Hood (1799-1845)、Joseph Conrad (1857-1924) や D. H. Lawrence (1885-1930)、James Joyce (1882-1941) といった有名作家が名を連ねている (Cross, *Royal Literary Fund* 15, 23)。ましてミーティヤードのようなマイナーな女性作家のことである。その収入が非常に不安定なものであったことは、想像に難くない。

一方マーティノーは、1852年から66年までの14年間、*The Daily News* の常連寄稿者であった。確かに、彼女が『エディンバラ・レビュー』、*Blackwood's Edinburgh Magazine*、*The Quarterly Review* といった大雑誌と常に良好な関係にあったとは言い難い。しかしそれは、Valerie Sanders が示唆するように、これらの雑誌が『経済学例解』に敵意ある評論を載せたこともあって、その男性中心の運営と男性優位の価値観をマーティノーの方が嫌ったためであろう (188-89)。そのかわりマーティノーは、John Chapman (1821-94) と Mary Ann Evans (のちの George Eliot) が編集する、より急進的でより実験的な *The Westminster Review* を信頼し、様々な評論を寄稿するばかりでなく、資金援助をしている。しかし、それも 1857・58 年頃までのことであり、チャップマンとの奴隷制廃止に関する意見の相違を機に、彼女は保守化した『ウエストミンスター・レビュー』を見限り、それまで距離を置いていた『エディンバラ・レビュー』に目を向けるようになる (松本 48)。つまり、マーティノーは、寄稿先を選ぶことができる立場にあったのだ。実際、50年代から60年代初頭にかけて、様々なジャーナルからの彼女へのオファーは引きも切らず、マーティノーは、1861年にチャールズ・ダーウインの兄 Erasmus Alvey Darwin (1804-26) に送った手紙のなかで、“I am always refusing work; and everything prospers that I sent out” と豪語している (*Letters to Fanny Wedgwood* 208)。また彼女は、ミーティヤードが寄稿を望んで叶わなかったディケンズの *Household Words* にも寄稿している (Sanders 188-89; Kanda 4, 4n15)。

マーティノーとミーティヤードはともに聴覚障害を患い、身体が弱かった。ともに女性作家という不利な立場にありながら、どちらもユニテリアンの知的土壌において社会派ジャーナリストとしての資質を育み、「女らしくない」トピックを扱った多くの著作を残している。それでは何が二人の命運を分けたのだろうか。もちろん、これまで見てきたように、二人の

作家としての資質や政治的傾向の違いもあるが、時代の流れも二人の人生に大きな影響を与えた。マーティノーは1820年代初頭、ミーティヤードは1840年代半ばから著作活動を開始している。ピーターソンが指摘するように、1820年代は文学雑誌の全盛期に当たる(62, 64)。定期刊行物の執筆料は1815年から35年までの間にピークを迎え(Erickson 72)、George Henry Lewes (1817-78)が『フレイザーズ・マガジン』で力説したように、文筆業はその収入をもって生活できる「職業」になった(285)。マーティノーが、ユニテリアンのネットワークとユニテリアンのジャーナルを通して経験を積み、作家としての地位を確立していったのは、まさにこの時期のことであった。

一方ミーティヤードのデビューは、フィクションをメインにした娯楽週刊誌が力を伸ばしていった時期に重なる。1840年代終わりから50年代初めに文芸娯楽誌が台頭する裏で、大衆向上雑誌は次々に廃刊の憂き目を見た。その進歩と向上という高邁かつ理想主義的な思想が大衆読者層に訴えるはずもなく、大衆向上雑誌は、理念は抜きにしてただ売ればよいという娯楽誌に負けたのだ(Maidment 83-84)。大衆向上雑誌の終焉後、ミーティヤードはウエッジウッドの伝記をもって成功するまで、生活苦に追われることになった。

*本論文は、シンポジウム「19世紀出版文化とユニテリアン・ネットワーク—Harriet Martineauを中心として」における研究発表「Harriet MartineauとEliza Meteyard：ジャーナルと交差する人間関係」に大幅に加筆し、修正を施したものである。

参考・引用文献

- Baggs, Chris. “ ‘ In the Separate Reading Room for Ladies Are Provided Those Publications Specially Interesting to Them ’ : Ladies ’ Reading Rooms and British Public Libraries 1850-1914.” *Victorian Periodical Review*, vol. 38, no. 3, fall 2005, pp. 280-306.
- Beetham, Margaret. *A Magazine of Her Own?: Domesticity and Desire in the Woman’s Magazine, 1800-1914*. Routledge, 1996.
- Crosland, Mrs. Newton [Camilla Toulmin]. *Landmarks of a Literary Life, 1820-1892*.

- Sampson Low and Marston, 1893.
- Cross, Nigel. *The Common Writer: Life in Nineteenth-Century Grub Street*. Cambridge UP, 1985.
- . *The Royal Literary Fund 1790-1918: An Introduction to the Fund's History and Archives with an Index of Applicants*. World Microfilms Publications, 1984.
- Duncan, Ian. *Scott's Shadow: The Novel in Romantic Edinburgh*. Princeton UP, 2007.
- Easley, Alexis. *First-Person Anonymous: Women Writers and Victorian Print Media, 1830-1870*. Ashgate Publishing, 2004.
- . "Tait's *Edinburgh Magazine* in the 1830s: Dialogues on Gender, Class, and Reform." *Victorian Periodicals Review*, vol. 38, no. 3, fall 2005, pp. 263-79.
- Eliot, George. "GE to Mr. and Mrs. Charles Bray and Sara Sophia Hennell [London, 2 June 1852]." *The George Eliot Letters*, edited by Gordon S. Haight, vol. 2, Yale UP, 1954, pp. 31-32.
- . "Silly Novels by Lady Novelists." *George Eliot: Selected Essays, Poems and Other Writings*, edited by A. S. Byatt and Nicholas Warren, Penguin, 1990, pp. 140-63. Originally published in *Westminster Reviews*, Oct. 1856, pp. 442-61.
- Erickson, Lee. *The Economy of Literary Form: English Literature and the Industrialization of Publishing, 1800-1850*. John Hopkins UP, 1996.
- Gleadle, Kathryn. *The Early Feminists: Radical Unitarians and the Emergence of the Women's Rights Movement, 1831-51*. Macmillan, 1995.
- Hardwick, Charles. "Eliza Meteyard." *Oddfellow's Magazine*, Jul. 1879, pp. 135-36.
- Harman, Barbara Leah. "In Promiscuous Company: Female Public Appearance in Elizabeth Gaskell's *North and South*." *Victorian Studies*, vol. 31, no. 3, spring 1988, pp. 351-74.
- Howitt, Mary. Letter to Eliza Meteyard. 23 Sep. 1846. Houghton Library, Harvard University, Cambridge, MA. Vol. 1 of fMS Eng 883.1. Manuscript.
- . Letter to [Eliza] Meteyard, 5 Aug. 1847. Houghton Library, Harvard University, Cambridge, MA. Vol. 1 of fMS Eng 883.1. Manuscript.
- . *Mary Howitt: An Autobiography*, edited by Margaret Howitt, Wm. Isbister, 1889. 2 vols.
- Howitt, William. "Observations of the Proposed Whittington Club." *People's Journal*, 24 Oct. 1846, pp. 236-38.
- Hunter, Fred. "Meteyard, Eliza (1816-1879)." *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford UP, 2004. <http://dx.doi:10.1093/ref:odnb/18624>.
- Hunter, Shelagh. *Harriet Martineau: The Poetics of Moralism*. Scholar Press, 1995.
- Johnston, Judith E. "Johnstone, Christian Isobel (1781-1857)." *Dictionary of Nineteenth-Century Journalism: In Great Britain and Ireland*, edited by Laurel Brake

- and Marysa Demoor, British Library and Academia Press, 2009, pp. 323-24.
- [Johnstone, Christian Isobel]. "Miss Martineau's Illustrations of Political Economy." *Tait's Edinburgh Magazine*, Aug. 1832, pp. 612-18.
- [---]. "Miss Martineau's Society in America, and Grund's American Society." *Tait's Edinburgh Magazine*, Jul. 1837, pp. 404-29.
- Kanda Tomoko. *The Early Journalism of Eliza Meteyard*. 2017. U of Leicester, PhD dissertation. https://figshare.le.ac.uk/articles/thesis/The_Early_Journalism_of_Eliza_Meteyard/10218659.
- Kent, Christopher. "The Whittington Club: A Bohemian Experiment in Middle Class Social Reform." *Victorian Studies*, vol. 18, no. 1, 1974, pp. 31-55.
- Lewes, G. H. "The Condition of Authors in England, Germany, and France." *Fraser's Magazine*, Mar. 1847, pp. 285-89.
- Lightbown, R. W. "An Introduction to the 1970 Edition." *The Life of Josiah Wedgwood*, by Eliza Meteyard, vol. 1, Cornmarket Press, 1970, pp. 1-32.
- Linton, E. L. *Sowing the Wind: A Novel*. Tinsley Brothers, 1867. 2 vols.
- Maidment, Brian. "Magazines of Popular Progress and the Artisans." *Victorian Periodical Review*, vol. 17, no. 3, fall 1984, pp. 83-94.
- [Martineau, Harriet] Discipulus. "Female Writers on Practical Divinity." *Monthly Repository*, Oct., Dec. 1822, pp. 593-96, 746-50.
- [---]---. "On Female Education." *Monthly Repository*, Feb. 1823, pp. 77-81.
- . *Harriet Martineau's Autobiography*. Smith, Elder, 1877. Gregg International Publishers, 1969. 2 vols.
- . "To Eliza Meteyard." 31 May [1852]. *Collected Letters of Harriet Martineau*, edited by Deborah Anna Logan, vol. 3, Pickering and Chatto, 2007, pp. 228-29.
- . "To Erasmus Darwin." 20 May 1861. *Harriet Martineau's Letter to Fanny Wedgwood*, edited by Elisabeth Sanders Arbuckle, Stanford UP, 1983, p. 208.
- . "Letter to Her Mother." 22 Jan. 1830. *Harriet Martineau's Autobiography with Memorials by Maria Weston Chapman*, edited by Weston Chapman, vol. 3, Smith and Elder, 1877, pp. 43-45.
- . "Letter to M. B. Maurice." 3 June 1833. Printed in "Some Autobiographical Particulars of Miss Harriet Martineau," *Monthly Repository*, Sep. 1833, pp. 612-15.
- Meteyard, Eliza. Letter to Charles Roach Smith. 16 Jun. 1857. Printed in Charles Roach Smith, "Miss Meteyard (Silverpen)," *Retrospections, Social and Archaeological*, vol. 2, George Bell, 1886, pp. 106-12.
- . *The Life of Josiah Wedgwood, from His Private Correspondence and Family Papers in the Possession of Joseph Mayer, F. Wedgwood, C. Darwin, Miss Wedgwood and Other*

- Original Sources with an Introductory Sketch of the Art of Pottery in England.* Hurst and Blackett, 1865-1866. 2 vols.
- [---]. "Scenes in the Life of an Authoress." *Tait's Edinburgh Magazine*, Dec. 1843, pp. 765-75; Jan., Apr. 1844, pp. 36-42, 245-54.
- . *Struggles for Fame*. T. C. Newby, 1845. 3 vols.
- [---] Silverpen. "The Whittington Club and the Ladies." *Douglas Jerrold's Weekly Newspaper*, 24 Oct. 1846, p. 343.
- Onslow, Barbara. *Women of the Press in Nineteenth-Century Britain*. Palgrave Macmillan, 2000.
- Peterson, Linda H. *Becoming a Woman of Letters: Myths of Authorship and Facts of the Victorian Market*. Princeton UP, 2009.
- Purvis, June. *Hard Lessons: The Lives and Education of Working-Class Women in Nineteenth-Century England*. Polity Press, 1989.
- Royal Literary Fund. *Archives of the Royal Literary Fund, 1790-1918*. World Microfilms, 1984.
- Sanders, Valerie. "'I have an All Important Review to Write': Harriet Martineau's Journalism." *Harriet Martineau and the Birth of Disciplines: Nineteenth-Century Intellectual Powerhouse*, edited by Sanders and Gaby Weiner, Routledge, 2017, pp. 187-200.
- Sennett, Richard. *The Fall of Public Man: On the Social Psychology of Capitalism*. Vintage, 1978.
- Shattock, Joanne. "Elizabeth Gaskell and Her Readers: From *Howitt's Journal* to the *Cornhill*." *Gaskell Journal*, no. 25, 2011, pp. 77-87.
- Slater, Michael. *Douglas Jerrold, 1803-1857*. Duckworth, 2002.
- "Struggles for Fame. By Meteyard, Eliza." *Literary Gazette*, 25 Oct. 1845, p. 704
- Uglow, Jenny. *The Lunar Men: The Friends Who Made the Future*. Faber and Faber, 2002.
- Walford, E. "Eliza Meteyard." Vol. 4 of *Portraits of Men of Eminence in Literature, Science, and Art, with Biographical Memoirs*, edited by E. Walford with the photographs by Ernest Edwards, Alfred William Bennett, 1865, pp. 33-37.
- Webb, R. K. "Fox, William Johnson (1786-1864)." *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford UP, 2004. <http://dx.doi:10.1093/ref:odnb/10047>.
- "Whittington Club." *Douglas Jerrold's Weekly Newspaper*, 8 May 1847, pp. 570-71.
- "The Whittington Club." *People's Journal*, 17 Oct. 1846, p. 32.
- "Whittington Club and Metropolitan Athenaeum." *Douglas Jerrold's Weekly Newspaper*, 31 Oct. 1846, p. 371.
- Woodring, Carl Ray. *Victorian Samplers: William and Mary Howitt*. U of Kansas P,

1952.

閑田朋子「イギリス1830年代・1840年代におけるユニテリアン急進派」日本大学
経済学部『経済集志』vol. 81, 2012, pp. 451-67.

松本三枝子「Harriet Martineauとヴィクトリア朝定期刊行物—*The Monthly
Repository*と*The Westminster Review*を中心に」日本英文学会『英文学研究 支部
統合号』vol. 15, 2023, pp. 1-9.

Summary

Harriet Martineau and Eliza Meteyard: Unitarian Journals and Unitarian Network

Tomoko Kanda

Harriet Martineau (1802-76) and Eliza Meteyard (1816-79) became progressive-minded writers in the Unitarian spiritual and cultural ethos. This paper focuses on their early contributions to Unitarian periodicals and their networking in the publishing industry in order to shed some light on the relationship between such networks and journalism.

In the nineteenth century women writers were at a significant disadvantage compared to their male counterparts. In general, the former were less successful both commercially and socially. Their “lack of education, lack of opportunity, lack of status and lack of property all combined to narrow the literary horizons of women” (Nigel Cross, *The Common Writer*, Cambridge UP, 1985, 203). Despite these disadvantages, both Martineau and Meteyard were still versatile and prolific writers. Their works covered a wide range of topics, including masculine, or unfeminine ones, such as economics, history, and politics.

The two writers contributed to several of the same journals in the late 1840s and early 1850s, which were closely associated with Unitarian writers and editors. They also had many common friends and acquaintances in Unitarian intellectual circles. This paper argues that these Unitarian periodicals and personal networking were instrumental in their becoming women of letters with social awareness.

